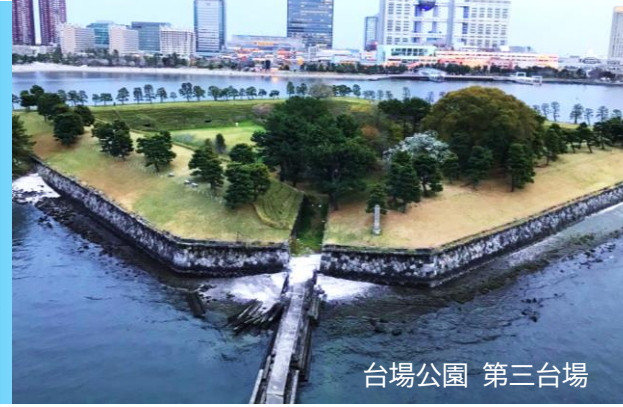


# 開港170周年記念

## 建設産業図書館所蔵

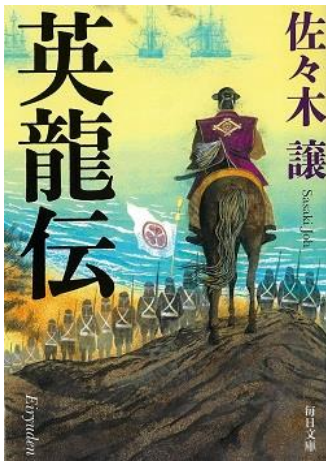
### 『品川台場』関連資料の紹介



台場公園 第三台場

本年はペリー提督率いるアメリカ艦隊の襲来によって長い鎖国が解かれ、1854年の日米和親条約の締結により下田と箱館が開港してから170周年にあたります。しかし、すんなりと開港にいたったわけではなく、当初幕府は外国船を追い払おうとしました。そのために建設された海上砲台“品川台場”を中心に当館所蔵の関連資料をご紹介します。

## 📖 小説



## 英龍伝 (毎日文庫)

佐々木讓 (著) / 毎日新聞出版 / 2020年

江川太郎左衛門英龍は、享和元年（1801）に蕪山代官江川家に生まれ、名代官の誉れ高い父・英毅の血を強く受けつぎ、学問や剣術にいそしむ利発な少年だった。

父の後を襲い蕪山代官となったのちも、知識欲は留まるところを知らず、蘭学者の幡崎鼎や渡辺崋山らや、西洋砲術家の高島秋帆などとの交流を通じ、欧米列強の脅威が間近に迫っていることを知る。

西洋式技術の導入をめぐって、幕府保守派と争い、海防と兵制について先進的な意見を具申。みずから洋式砲をも製作し、遅きに過ぎると知りながら幕閣の命により品川台場建設を指揮するなど、時代に先んじた慧眼をもち、そして早すぎる死を迎えた英傑の生涯を描く著者「幕末幕臣三部作」の最終巻。



## 我、鉄路を拓かん

梶よう子 (著) / PHP 研究所 / 2022年

江川英龍が指揮した品川台場建設には多くの人々が携わった。本書の主人公である平野弥十郎もその一人であり、台場の下埋めに使う土丹岩の切り出しから御用船への積み込みの仕事を請け負った。

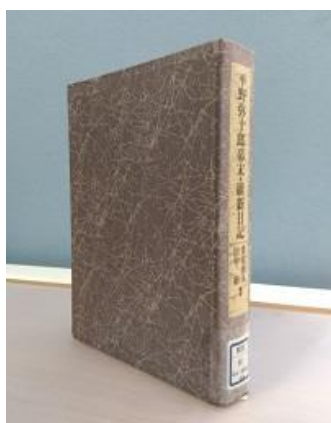
また平野は神奈川台場の建設も請け負っており、作中ではこれら台場についてこのように述べている。

「ご公儀のやってることは矛盾だらけだってね。ベルリが怖くて、品川に海上台場を造った、けど結局、異国に港を開くよう説得されちゃった。だから横浜に港を造った。それなのに今度もまだ台場（神奈川台場）だ。おかしいでしょう？」

平野の言う通り、これら台場建設は欧州列強の脅威におびえた幕府による矛盾に満ちた無用の産物であった。

しかし平野は、こうした台場建設工事などの経験を日本初の鉄道・新橋-横浜間鉄道建設などに活かし、活躍していくことになる。

## 日記



# 平野弥十郎幕末・維新日記

桑原真人 等(編著)／北海道大学図書館刊行会／  
2000年

『我、鉄路を拓かん』の主人公、平野弥十郎が文政6年(1823)から明治15年(1882)まで認めた日記を翻刻し、解説や解題を加えたもの。

平野は、文政6年(1823)浅草の雪踏仲買商の家に生まれ、嘉永5年(1852)に土木建築請負人となり、神奈川台場や築地ホテル館、新橋-横浜間の日本で最初の鉄道など、多くの工事に携わり名を上げた。その後、開拓使として北海道へ渡り、札幌本道の工事を手掛けるなど、民・官の立場で幕末から明治期の建設工事に携わった異色の経歴をもつ。

彼のような請負人の日記が、開陳されることは珍しく、建設史のみならず幕末史や庶民の生活誌を研究するうえでも貴重な資料と言える。



# 堤磯右衛門 幕末維新「懐中覚」

堤磯右衛門(著)・横浜開港資料館(編)／  
横浜開港資料普及協会／1988年

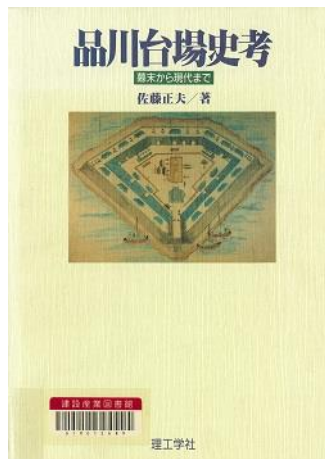
台場建設に携わった請負人は、もちろん平野弥十郎だけではない。この「懐中覚」は、品川台場と神奈川台場の建設を請負った堤磯右衛門が、万延元年(1860)から明治10年(1877)まで、折に触れて書き綴った覚え書を翻刻したもの。

堤磯右衛門は、横浜市磯子区に生れ、嘉永6年(1853)の黒船来航時には家督を継ぎ、村役人を務めていた。その年、幕府は品川台場建設に着手し、磯右衛門は農民数名と協同で請負人として参加した。

続く神奈川台場、横浜外国人居留地の建設を経て、文久3年(1863)には江戸の請負人・蔵田清右衛門の下請となり事業を拡大するも、横須賀製

鉄所（造船所）の建設で現場監督を務めたおり、フランス人化学技師からたまたま聞いた石鹼製造に興味を持ち、石鹼製造販売業に転身した。その技術は今日の花王（株）、ライオン（株）などに受け継がれ、石鹼産業の礎を築くこととなった。

## 建設史



# 品川台場史考

幕末から現代まで

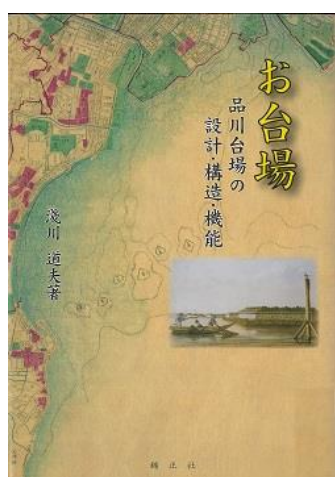
佐藤正夫（著）／理工学社／1997年

幕命を受けた江川英龍らは、江戸湾海岸線を巡察し、ペリー2度目の来航に備えた江戸湾防備の上申をおこなった。これによれば、江戸湾の入り口にあたる富津—観音崎を第一防衛線、本牧—木更津を第二防衛線、羽田沖を第三防衛線、品川沖は最終防衛線として、台場建設を行うというものだった。

しかし、事態は急を要し、また当時の土木技術、幕府財政を鑑み、水深も浅く「御手軽」という理由から、最終防衛線のはずである品川台場から建設されることとなった。

しかも台場は、計11基建設される予定だったが、ペリー再来に間に合わず、半分以下の5基が築造された段階で中止され、据え付けられ大砲は一度も火を噴くことはなかった。

本書はこのような品川台場の建設に至る背景から、本書刊行当時までの歴史的経緯、構造、建設費用、守備体制など、文献史料や既存の研究を紐解き、豊富な写真や絵図を示しながら解説する。



# お台場

品川台場の設計・構造・機能

浅川道夫（著）／錦正社／2009年

西洋の築城術が品川台場に与えた影響について探求するのが本書のメインテーマとなる。先行研究のほとんどが、「江川氏秘記」に依拠しており、史料中の「台場之義ハエンゲルベルツノ製城書ニ所載ノ間隔連堡ノ内『レドウテン』ノ『リニー』ト申堡ニテ」という件を引用するにとどまっているという。

本書ではさらに江川文庫所蔵の「台場築造に用いた西洋書籍」という史料に示された蘭書に着目し、それらを個々に探求して考察を深める。

## 📖 事典



# 国別 城郭・陣屋・要害台場事典

西ヶ谷恭弘（編）／東京堂出版／2002年

台場は品川台場や神奈川台場だけではなく、全国沿岸で凡そ 1000 か所も築造された。

本書では明治維新時（慶応3年10月の大政奉還から明治4年7月の廃藩置県まで）に存在した城郭とそれに類する施設、とくに諸大名が築造した台場を国別に集大成することが大きな目的の一つとなっている。

## 📖 総括



# 逝きし世の面影

渡辺京二（著）／葦書房／1998年

徳川幕府は旧態に固執し、品川台場などを建設して諸外国の来襲を阻もうとした。しかし、抗うべくもない時代の流れに対し、これらはしょせん蟻螂の斧にすぎなかった。

西洋技術の象徴ともいべき鉄道は、わずかの期間に津々浦まで網をめぐらし、日本は急速に均一化され、富国強兵・殖産興業の名のもとに西洋化の道を一気に進むこととなった。

現在、日本は経済大国の一つに数えられ、私たちはその恩恵を享受している。しかし、文明開化の名のもとに一新された私たちは、何も失ってはこなかったのだろうか。

開港間もなく、日本を訪れた外国人たちは、その見聞記に「貧乏人はいるけれど、貧困はない」、「こんなに笑う人たちを私は知らない」、「美しい国」、「妖精の国」などつつり、豊かな心を持つ日本人と、比類がない国土の美しさをほめたたえた。

これらは異邦人たちが抱くオリエンタリズムに過ぎないのか。それとも何か大切なものを、私たちは捨て去ってしまったのか。それは本書を読んでご判断いただきたい。



品川区立台場小学校 品川台場四号基跡に建てられた